

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370312

研究課題名(和文)太平洋における地方性の研究

研究課題名(英文)A Study on Locality in the Pacific Region

研究代表者

山本 卓 (Yamamoto, Taku)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：10293325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、太平洋文学作品が提示する伝統文化への態度を中心に、20世紀の太平洋地域における「地方性」の意義の変遷を検証した。1990年代以降、作家たちはそれまでの「西洋ではない」ということで規定される周縁としての太平洋世界ではなく、より積極的な意味を付与した一地方としての太平洋像を模索し、西洋対非西洋という言説の枠を越えようとする。本研究では、19世紀末にサモアからヨーロッパに向けて「太平洋」を発信したR. L. Stevensonを起点に、20世紀における大衆文学作品や映画を経て、1990年代以降の作品が提示する西洋と非西洋という枠組みの超克をたどり、20世紀の太平洋の地方性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project attempted to examine the concepts of locality in the twentieth-century Pacific literature. The early Pacific literature typically discussed personal and tribal identities which were oppressed under Western colonialism, insisting on a more stable and unconstrained style of self. However, since 1990s, writers have been trying to discover and create a new concept of the Pacific which is to be regulated not as a counterpart of the west but as the original and autonomous, to transcend the binary opposition of Self and Other or the center and its marginality. The study has traced the transformation of the concept of locality and revealed its significance in the contemporary Pacific literature.

研究分野：Literature in English

キーワード：太平洋文学 ポストコロニアル批評 オセアニア文学 マオリ文学 R. L. スティーヴンソン

1. 研究開始当初の背景

本研究には、より大きな背景と局所的な背景の二つがある。大きな背景は概念としての太平洋についての表象研究である。18世紀中頃に「発見された」太平洋が西洋においてどのように伝えられ、意味づけされてきたかということは、1990年代以降の太平洋研究の主要なテーマとなってきた。代表的な研究としては *Far-Fetched Facts* (Neil Rennie, 1995) や *South Sea Maidens* (Michael Sturma, 2002) を挙げることができる。21世紀になると太平洋文学作品に焦点を当てた研究が目立ち始める。例えば、Michelle Keown による *Postcolonial Pacific Writing* (2005) や *Pacific Islands Writing* (2007) は太平洋文学を包括的に論じたものであるし、Paul Sharrad の *Albert Wendt and Pacific Literature* (2003) は島嶼文学の個別作家研究として位置づけられる。これらは本研究の背景に大きく関わっており、研究を遂行する点においてもかなり依拠することになった。

他方、局所的な背景として、1990年頃を境に顕在化する島嶼作家の伝統文化へのまなざしの変化がある。もっとも明示的な例はテキストの言葉の使用方法だろう。近年の島嶼文学作品は、80年代までは一般的であった現地語への注釈を省略するだけでなく、意図的に現地語を多用することによって、土着文化が持つ概念のニュアンスを表現しようとする。またこれは、基本的には英語によって書かれたテキストにおいて、英語が現地の文化表象に過度な制限をかけることへの回避でもある。物語の語りにおいても、とりわけ21世紀になってからの作品には、意図的なジャンルの混交、視点の多重化、島嶼文化の伝統である口承形態の採用などの実験的な試みが散見される。また他の学問分野に目を向けるとき、Peter Larmour の *Interpreting Corruption* (2012) といった文化人類学研究のように、太平洋島嶼地域の悪習とされる賄賂に肯定的な意味を見いだす研究も出現するなど、従来とは異なる枠組みで「太平洋」を再解釈する動きが広がってきた。

2. 研究の目的

イギリス文学などの伝統的な研究分野と比較すると、太平洋文学の歴史はかなり短い。しかしながら、その短さゆえにきわめて流動性に富む。1960年代から70年代にかけての黎明期、80年代のジャンルとしての太平洋文学の確立の試み、90年代半ばから現在に及ぶ急速なグローバル化における独自のアイデンティティの模索と大きく変遷してきた。とりわけ過去20年間における太平洋住民による太平洋像の再定義は、太平洋文学のあり方と深い関わりを持つ。本研究ではこうした動きを、それまでの西洋文化と土着文化の対立

を超えようとする新しい試みとして解釈し、旧植民地の作家が背景に抱える歴史性に照らし合わせて、彼らの意図を明確化する。Albert Wendt や Epeli Hau'ofa といった太平洋作家たちは「西洋ではない」ということで規定される周縁、ひいては植民地時代の力学がそのまま適応される従属物としての太平洋世界ではなく、より積極的な意味を付与した一地方としての太平洋像を模索し、西洋対非西洋という概念の枠の超克を試みる。本研究では、19世紀末にサモアからヨーロッパに向けて「太平洋」を発信した R. L. Stevenson を起点に、20世紀における太平洋像の確立と強化に寄与する Charles Nordhoff と James Norman Hall による大衆文学作品や映画、文化人類学、1970年代から1980年代にかけての太平洋作家による太平洋イメージへの抵抗、そして1990年代以降の作品が提示する西洋と非西洋という枠組みの超克をたどり、20世紀と21世紀の太平洋の地方性を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は (1) 20世紀の太平洋像の形成、(2) 太平洋像の大衆化とその強化、(3) 初期島嶼作家による太平洋イメージへの抵抗、(4) 20世紀末以降の太平洋文学による「地方」としての太平洋像提示への試みの同定、の四段階を設定し、(1)を初年度、(2)を第二年度、(3)と(4)を最終年度における研究過程とした。(なお、後述するとおり、延長申請のために最終年度が1年先送りされ、結果的に(3)が第三年度、(4)が最終年度となった)

太平洋像の歴史は18世紀後半にまで遡ることができるが、本研究では太平洋作家と関わりの深い R. L. Stevenson を20世紀の太平洋像形成の起点と位置づけ、項目(1)における主要研究対象作家とする。Stevenson の南海物語やエッセイは、彼自身のサモアでの見聞と知見を色濃く反映しており、本項目で扱う作家としては最も適当である。

項目(2)の「太平洋像の大衆化とその強化」においては、長期間タヒチに滞在し、数多くの冒険小説を創作した Charles Nordhoff と James Norman Hall をおもに検証する。彼らについては映像化された作品も多く、映画による太平洋イメージの大衆化において、文学における表象と映像における表象をつなぐ重要な作家となる。

1970年代から1880年代にかけての島嶼作家の作品、および発言を項目(3)の検討対象とする。太平洋文学の第一人者であり、今もニュージーランドから作品を発信する Wendt、トンガ出身の文化人類学者 Hau'ofa による作品から、それぞれの作家が提示する西洋文化への抵抗、および土着文化への態度を検証する。

項目(4)においては Hau'ofa を中心に、

1990年代以降の島嶼作品における西洋と非西洋の二項対立の超克に焦点を当てる。ここでは、20世紀末に起こった急速なグローバル化やインターネットの普及による地方性の再評価といった要因に対しての個々の作家の態度も重要になる。こうした島嶼作家の研究の一方で、Witi Ihimaeraなどのマオリ作家を「地方性」への再評価の先駆者として適宜検証する。以上の過程を経て、19世紀末から21世紀初頭のおよそ100年にわたる太平洋世界の地方性の意義を同定する。

4. 研究成果

平成26年度は太平洋地域に居住し、そこから西洋に向けて物語を発信した英語圏作家について研究を進めた。まず着手したのはR. L. Stevensonで、サンフランシスコからハワイ諸島を経てサモアに到達した過程で記述した紀行文、サモアにおける生活を叙述した書簡やエッセイを中心に据え、それらにおける作家の認識と当時の太平洋世界のイメージとの偏差を同定する一方で、彼が書いた南海物語群が提示する太平洋表象との相同性と差異を探った。とりわけ中編小説「ファレサアの浜」は出版にいたる経緯において、イギリスの編集者が持つ太平洋像とStevensonのそれとがせめぎ合った作品として解釈でき、周縁としての位置付けと地方としての認識の相克の具体的な事例として確認できた。

20世紀の太平洋表象についてはCharles NordhoffとJames HallのBounty号三部作を開始点として、関連文学作品の読解および関連映像作品の分析を行った。ベストセラーとなったThe Bounty Trilogyにおける太平洋像はStevensonの南海作品に比較すると、太平洋に関わる伝統的な言説の反復という色合いが濃い。その一方で、(多くは語り手の他意のない述懐という形をとって)西洋が規定してきた太平洋世界について批判的な見解を述べるなど、既存のイメージを修正するベクトルも看取できる。本研究のテーマである「地方」としての太平洋表象を考えると、NordhoffとHallは従来の太平洋像の正当性に疑問を呈していると解釈できるかもしれないが、彼らの著作を確認した限りでは、Stevensonの作品ほどのメッセージ性は見当たらない。西洋によって周縁化された太平洋のイメージに客観的な見解を加えつつも、結局のところ伝統的な太平洋像に帰結してしまっているという印象が拭えないのである。この印象は逆説的に、Stevensonによる太平洋像にも波及する。すなわち、彼は南海小説やエッセイによって現実の太平洋像を発信しようとしたが、それらもBallantyneの*The Coral Island*といった19世紀の先行作品が示した太平洋像の再生産ではないかという問いが浮上するのだ。

こうした問題を扱うために、平成27年度は太平洋文学作品の読解をとおり、島嶼作家における地方の意義を探ると同時に、太平洋からの情報発信者としてのR. L. Stevenson、およびNordhoff, J. N. Hallの位置も再確認した。島嶼作家として、太平洋文学第一世代ではAlbert Wendt、第二世代ではSia Figielを取り上げ、とりわけWendtとStevensonとの関係性に注目した。Wendtの初期の作品において半ば神格化されていたStevensonは、2003年の長編小説*The Mango's Kiss*では、無邪気な植民地主義者として描かれる。また、Sia Figielの*Where We Once Belonged*では主人公の少女が、キタノ・ツシタラ・ホテルを眺めながら夢想する場面でStevensonが言及される。ここでは、スコットランド人作家の植民地主義者の側面が強調されており、とりわけ好意的な表象とはいえない。これらの作品の読解によって、20世紀末から21世紀にかけての太平洋作品によるStevenson像の転換への試みが、本研究のテーマである中心と地方(周縁)の力学に大きな関わりを持つ可能性があることを確認した。さらに40年間にわたるWendtの作品を年代順に辿り、作家の地方性への態度の変化を検証した。植民地主義に批判的でありながらも、それに変わる主体のあり方を見いだせない初期の作品(*Sons for the Return Home*, *Pouliuli*, *Leaves of the Banyan Tree*)から、西洋を批判すると同時にその視座自体を客体化し、そこに積極的な意味を付与しようとする2000年代の物語(*The Mango's Kiss*, *The Adventures of Vela*)への変容が存在するのだ。また、WendtとStevensonを並置することで、NordhoffとHallの作品群は、植民地主義が終焉を迎えつつも依然として島嶼民族の声が不在のままである状況に、すっぱりと入り込んだようなものであり、それは19世紀初頭に存在しているはずの物語(*The Bounty Trilogy*)の語り手が、しばしば20世紀的な視座から語るという不合理な語りにも象徴されることも確認できた。

なお、ここまでの研究成果の中間まとめとして、第67回日本英文学会中部支部大会において「太平洋世界の情報発信者としてのR. L. スティーヴンソン」、第2回日本コンラッド協会全国大会において「植民地口マンズの系譜：ヴィクトリア朝冒険小説とコンラッド」を発表した。前者はWendtの評論や長編小説*The Mango's Kiss*で言及される植民地主義者としてのStevenson像と伝記的な事項とを比較し、「現実の南海」を伝えることが19世紀末においていかに困難であったかを論じた。また、後者では、植民地を舞台にした物語におけるConradの語りやStevensonのそれと比較した。検証から浮かび上がったのは、Stevenson自身の自己演出である。読者へのアピールという点を考慮し

ても、作家が太平洋世界での生活と活動をや
や過剰に語りたがる傾向は否定できないし、
こうした個人的な特質も太平洋像を構成す
る一部として機能しうることを確認した。

平成 28 年度は広義の太平洋文学として、
太平洋民族でありながらも島嶼民族の範疇
に入らないマオリ作家の作品にも研究対象
を拡大した。中心的に読解した作品は Witi
Ihimaera によるものであるが、女性作家と
して Patricia Grace の初期作品も研究対象に
含めた。マオリの物語群から確認できたの
は、西洋に対するオセアニア的な主体と歴
史背景の相関性である。マオリ民族の歴史
においては植民者による土地の簞奪が大き
な事件となっており、それゆえ物語のテー
マにも選ばれやすい。西洋との対立が土地
の争奪と重なり合うだけでなく、現在の西
洋とマオリを巡る政治性をも包含し、最終
的には民族の主体の問題として顕在化する
傾向がある。他方、島嶼作家が問題化する
地方性は、家族や村といった比較的規模の
小さい集団から生じる個人の自己の位置づ
けを重視してきた。しかしながら、近年の
Wendt の作品が、個人的なアイデンティ
ティを扱うと同時にサモア民族の世界観を問
い直そうとしてきていることは、汎オセア
ニア的な大きな地方性の物語への合流とも
解釈できるかもしれない。当該年度の成果と
しては Stevenson と Wendt のポリネシア
人表象の差異に着目し、作家としての自己像
の構築方法を検証した論文「現地の情報発信
者としての R. L. スティーヴンスン:『ファ
レサアの浜』と 19 世紀末の太平洋」を发表
した。これは前年度の日本英文学会中部支部
での発表に大幅な加筆をしたものである。

延長申請により最終年度が平成 29 年度ま
でずれ込むことになったが、前年度に引き続
き島嶼作家の Albert Wendt や Sia Figiel、マ
オリ作家の Witi Ihimaera と Patricia Grace
を再び包括的に参照し、西洋に対するオセア
ニア的な主体と歴史背景の相関性を検証し
た。その結果、前年度において可能性として
浮上した、島嶼作家とマオリ作家による「汎
オセアニア的な大きな地方性の物語への合
流」が妥当性を持つことを確認できた。個人
の重要性を認識しつつもより大きな歴史を
志向する傾向はオセアニア地域の文学全般
の動きであり、周縁化されない地方性がとり
わけ重要な概念となる。こうした認識に立つ
とき、Epeli Hau'ofa の評論が、グローバル
化によって少なくとも地理的な要因に起因
する障壁が低くなった今日的な意味合いを
帯びて再浮上する。

Hau'ofa は、1980 年代初頭までは植民地主
義を批判することによって太平洋世界の独
自性を模索していた様子があるものの、1980
年代後半にはすでに太平洋という概念自体
の見直しを試みている。すなわち、西洋的な

主体を真っ向から否定するのではなく、批判
的でありつつも、西洋性の不在を望めない現
実を受け入れ、そこを前提にして既存の太平
洋イメージをまずは太平洋の人々の認識か
ら変革しようというものである。こうした方
策は同年代作家の Wendt と比較するとかな
り穏当に見えるかもしれないが、そこに
Hau'ofa の思想の独自性を指摘できる。さら
に 1990 年代に入ると彼は「海」に着目し、
海に個々の島が存在するのではなく、島によ
って海が成立するという考え方を提唱する。
この場合、海とは個々の島をつなぐ共通の背
景のようなものであり、海によって島々の文
化や文明が伝播したという事実を評価する
のだ。Hau'ofa は既存の「島」の概念を再規
定することによって、周縁にはとどまらず独
自の地方性を持った空間としての太平洋世
界を描く。こうした思想はスケールの点で同
時代の人々の意識を遙かに超えており、
Hau'ofa を現在のオセアニア作家の試みの
先駆けとみなせるだろう。また、彼の哲学は
創作物語にも表れている。ラブレ的な猥雑
性が目を引き、それゆえに荒唐無稽な作品に
考えられがちな *Kisses in the Nederends*
を作家の地方性にたいする姿勢を踏まえて
読解するとき、作品が作者の思想の具現化で
あり、再評価に値することが分かる。

Hau'ofa についての研究結果は、第 69 回日
本英文学会中部支部大会のシンポジウムに
おいて「オセアニア文学と Anthropocene—ポ
スト・コロニアリズムと環境学の接点を探
る」という題目で発表した。発表においては、
作品が提示する雑多な空間こそが地方とし
ての太平洋世界の表象であることを、歴史的
な事項や作家のエッセイなどを参照しなが
ら論じた。

本研究が明らかにした 20 世紀における地
方性としての太平洋と文学作品のあり方は、
ごく一部にすぎないし、これは現在も進行中
の問題である。本研究はこれまでに一定の評
価を受けてきた作家をその対象としたが、よ
り精密な検証のためには太平洋文学史に埋
もれた作家も対象にする必要がある。しかし
ながら、とりわけ島嶼文学は、その市場規模
の小ささから職業としての創作活動がきわ
めて成立しにくく、それゆえ職業作家とアマ
チュア作家の境界が曖昧であること、さら
には歴史の短さゆえにいわゆるキャンオンが
いまだに確立しておらず（例えば、1980 年
に Wendt が編纂したアンソロジー、*Lali* と 2002
年の *Whetu Moana* を比較すると、長期間に
わたって活動している詩人が少ないことに
驚かされる）Ihimaera や Wendt などのベ
テラン作家を除けば、個々の作家が独自の活
動をおこなっている状態であることなどを
考慮に入れると、どの作家を研究対象とす
るかという問題さえ即座に解決できないの
である。繰り返しになるが、本研究の結論は暫
定的なものであり、今後の動向によっては新

たな知見が浮上するものと思われる。しかしながら、グローバル化の中で地方としての太平洋という構図は、今後もしばらく継続するテーマだろうし、注目に値するトピックであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

山本 卓、「現地の情報発信者としての R. L. スティーヴンソン: 『ファレサアの浜』と19世紀末の太平洋」、『金沢大学学校教育系紀要』9号、(2017) 41-52、査読無

〔学会発表〕(計3件)

山本 卓、「オセアニア文学と Anthropocene—ポスト・コロニアリズムと環境学の接点を探る」、『第69回日本英文学会中部支部大会、2017年10月28日、福井大学(福井)』

山本 卓、「植民地ロマンスの系譜: ヴィクトリア朝冒険小説とコンラッド」、『第2回日本コンラッド協会大会、2015年11月17日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪)』

山本 卓、「太平洋世界の情報発信者としての R. L. スティーヴンソン」、『第67回日本英文学会中部支部大会、2015年10月17日、名古屋工業大学(愛知)』

〔その他〕

山本 卓、「太平洋世界の情報発信者としての R. L. スティーヴンソン」、『第88回日本英文学会大会 Proceedings』、(2017)、201-2

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 卓(YAMAMOTO TAKU)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号 : 10293325